

- George Allen & Unwin.
- Perrin, Porter G. 1965. *Writer's Guide and Index to English*. 6th ed.(1978); Tokyo: Maruzen.
- POD^{5.7} = *The Pocket Oxford Dictionary*. 5th ed. (1969); 7th ed.(1984). Oxford : Clarendon Press.
- OALD = *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 3rd ed. 11th impression (revised)(1980); 4th ed.(1989). Oxford; Oxford University Press.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press. 1993.
- Quirk, Randolph et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow, Essex: Longman.
- Swan, Michael. 1980. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Todd, Loreto & I. Hancock. 1986. *International English Usage*. London: Groom Helm.
- WDEU = *Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, Mass.: Merriam-Webster, 1989.
- Wilson, Kenneth G. 1993. *The Columbia Guide to Standard American English*. New York. Columbia University Press.
- Wood, F. T. 1962. *Current English Usage*. London: Macmillan.

けるtillの減少傾向が、そんなに急速には進んでいない、ということではできらるろう。

- 5) Quirk, Randolph, et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*.8.58.
- 6) Konomiではuntil 60に対してtill 1となっており、うち従属節内ではuntilが2例見られるが、tillは見られない。
- 7) 因みに、LOBの4例は2例が同一物からのものではあるが、全体としては三つの異なった物から採られていることから必ずしも、たまたま個人的な好みによる集中ということでもない。
- 8) この他に、文体的な視点から興味を惹くのは次の文である。
lectures were given at the college—which, incidentally, was the first home of the royal society—till 1768, when they were delivered at the royal exchange until 1841, the year when the present Gresham College was erected. (LBJ:37:079)
ここではtillとuntilが同一文に共起し、どちらも年号に先行する前置詞として現れている。この他にも2語が共起する例(LOB)が2例あるが、どちらもtillが先行し、untilが後に回るといったパターンとなっている。音調的な感覚によるのであろうか。
- 9) Konomiでは前者の構文にuntil 22例、till 5例で、後者ではuntil 7例のみでtillは見られない。

参 考 文 献

(以下に挙げる文献は小論で触れたものに限定している。)

- AHD=*The American Heritage Dictionary of the English Language*.
Boston:Houghton Mifflin, 1969.
- Bryant, Margaret M.1962. *Current American Usage*. New York:Funk & Wagnalls.
- Copperud, Roy H. 1980. *American Usage and Style: The Consensus*. New York:Van Nostrand Reinhold Company.
- Fowler, Henry W. *A Dictionary of Modern English Usage*. 1st ed.(1926), 2nd ed. rev. by Ernest Gowers.(1965).
- Fries, Charles C. 1940. *American English Grammar*. Tokyo. Appleton-Century Crofts/Maruzen.
- Greenbaum, S. and Janet Whitcut. 1988. *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex:Longman.
- Howard, Godfrey. 1993. *The Good English Guide: English Usage in the 1990s*. London. Pan Macmillan.
- Jespersen, Otto. 1940. *A Modern English Grammar, Part V*. London:

- (8) From June, 1942 *until* December, 1945, Pfaff served in the Army Air Corps.(BRA:08:009)
- (9) it was not *till* the middle of the week that I began to welcome her, caring for her *until* Saturday night.(LBG:26:014)

IV

以上、同義語*till*と*until*についてその異同を見てきた。まず両語の使用頻度から云って英米ともに*until*の使用が圧倒的多数であり、*till*の占める割合は1割前後と極めて低いが、これをこまかく見るとアメリカ英語に比べてイギリス英語の*till*の使用がやや多い。中でもこの*till*の使用に関して英米で際立った対照を見せるのは前置詞と接続詞の観点からの比較である。全般に接続詞が高い頻度を見せる中、イギリス英語の*till*の前置詞としての使用の多さが目立ち、この点でアメリカ英語のそれとは異なった傾向を示している。また文体的な観点から、文の頭位(従属節においては節の頭位)においては品詞の如何に関わらず英米ともに*until*が好まれ、*till*の使用は稀である。

註

- * 小論は、共同研究「コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究」(代表者 田島松二)の成果の一部である。尚、データ検索は共同研究者のひとり、許斐慧二氏(九州工業大学情報工学部)にお願いした。記して謝意を表する。
- 1) 田島松二・許斐慧二「コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究(1)―‘prevent me (from) going’と‘prevent my going’―」『英語英文学論叢』(九州大学)第43集(1993)所収。
- 2) 例えば、*till*は「時間のある一点」に、*until*は「幅を持った時間」に用いる傾向があるとし、次の例をあげる。
We didn't get home *till* ten o'clock.
You must stay in bed *until* your temperature is normal.
- 3) Cf. MEG V. p.350
- 4) 因みに1980年代以降のアメリカの刊行物(短編小説、雑誌、エッセイ、コラム等)を資料として許斐慧二氏が作成した、量的にはBrownやLOBに匹敵するコンピューター・コーパス(以下Konomi)では*until* 691例、*till* 95例となっていて、*till*の占める割合は約12%となり、同じアメリカ英語のBrownコーパスに比べて高く、むしろ13.6%のLOBコーパスよりである。この数字の意味は多少のコーパスの質の違いもあり即断できないが、少なくとも、この20~30年の間でアメリカ英語にお

いであろう。

次に、先に見たように、文体的なレベルの差 (formal/informal) がこれらの語の使用にある程度影響するということが考えられることから、この観点からの資料の検討を試みる。LOB, Brown両コーパスとも基本的には書かれたものであることから、自ずと限界はあるが、ここでは一応、コーパスのジャンル別の両語の分布を見てみることにする。まず、LOBではuntilとtillの割合は477 (86.4%):75 (13.6%) となっており、untilの頻度はtillに比べて6倍強と多いが、その中でもtillの割合が高いのはK 'General fiction' (29.6%) を最高にD 'Religion', P 'Romance and love story', L 'Mystery and detective fiction', G 'Belles lettres, biography, essays'がいずれも20%台を示している。低い方ではB 'Press:editorial', C 'Press:reviews', H 'Miscellaneous', R 'Humour'でいずれもゼロである。

一方、アメリカ英語ではどうであろうか。Brownではuntilとtillの割合は430 (90.5%):45 (9.5%) となっており、LOBでの両語の比率差より、さらに差が拡大し、untilはtillの約9倍の頻度を示す。そのような中で、比較的tillの頻度が高いジャンルとしてはR 'Humour' (28.6%;但し、これは7例中2例からきた数字であり、問題がある), P 'Romance and love story' (22.6%), L 'Mystery and detective story'(21.1%) があり、あとはこれらとは大きく差を開いて低率となる。このようなことからtillの分布をジャンル別に見た場合、LOBのD 'Religion'を別にすればフィクション系統のものにtillが比較的多く現われるということが英米に共通して言えるであろうか。純粋な会話をコーパスとしたものではないにしろ、比較的そのような要素が高いと思われるフィクション系の分野でtillの比率が高く、逆に新聞雑誌関係、批評といった比較的固い文、少なくともinformalではない文体が予想される場所ではtillは使用されないといった傾向である。従って、Greenbaum & Witcutその他が述べているように、tillはどちらかというと言語的、ということになるであろう。ただし、同様に固い文が予想されるReligionではBrownではゼロであるのに対して、LOBでは14例中4例(28.6%)⁷⁾ と高く、英米で対照的な数となっている。⁸⁾

この他、次の例文に見られるような'from...till/until...'(29例) や'it is not till/until...that...'(27例) といった構文との関連性を見てみたが、Brownではいずれの構文においてもuntilのみで、tillの使用が見られないということを除いては特に言及すべきことは認められない。⁹⁾

見てみる。文頭に用いられた両語の分布は次の表のとおりである。

		LOB		Brown		計
untill	prep.	16	29	28	56	85
	conj.	13		28		
till	prep.	0	1	1	3	4
	conj.	1		2		

表に見られるように英米合わせてtillは僅かに4例であるのに対してuntilは85と圧倒的な差で文頭位を占める。LOBでは文頭位のuntilが29回見られるのに対してtill1回となっており、Brownではuntilの56に対して、tillは3に止まる。このことから、英米いずれにおいても、その絶対数の少なさを勘案しても、tillが文頭位に来ることは稀であると言うことができよう。

- (5) I am saying only that *until* a fuller and different kind of evidence comes in, any discussion of alienation must be understood to have certain important limitations.(BRJ:63:057)
- (6) And *until* this protection is at least as concrete as, say, the row of hotels that bars us from our own sands at Miami Beach, those who represent us all should agree to nothing.(BRB:04:154)

一方、また、この表からわかる通り、これら両語が接続詞として用いられようと、前置詞で用いられようと、この傾向に変わりはないと云ってよいであろう。⁶⁾ また次の例に見られるように従属節の中でも、節の頭位が問題となる。

- (7) American policy should press constantly the view that *until* these governments demand efficiency and effectiveness of their bureaucracies there is not the slightest hope that they will either modernize or democratize their societies.(BRJ:22:067)

この位置では、Brownで3例(いずれも conj.)、LOBで3例(preп. 2, conj. 1)が見られるが、いずれもuntilであり、tillの例は見られない。従って、こゝでも節の冒頭ではuntilが用いられるという傾向に変化は見られないと言ってよ

まずuntilに関しては前置詞と接続詞の割合はLOBでは186対291（39%対61%）で、接続詞の割合が大きく、Brownでは125対305（29%対71%）で、イギリス英語に比べて、さらに接続詞としての使用が多い。tillに関しては、まずLOBでは36対39（48%対52%）であり、その比率は小差ながら逆転している。Brownでは前置詞と接続詞の割合は8対37（17.8%対82.2%）であり、untilの場合よりむしろ差が大きくなっている。ここで注目されるのはtillに関するLOBとBrownの比率の差である。即ち、Brownでは圧倒的に接続詞としてのtillが多いのに対して、LOBでは逆に前置詞としての頻度が接続詞のそれを僅かではあるが上回っていることである。以下にそれぞれの例文をあげる。

- (1) he wrote poems in every subsequent year *until* his death in 1933.(LBC:12:011)
- (2) Most passengers didn't know what had happened *until* they got on the ground.(BRA:42:078)
- (3) I didn't see her *till* several days later at the wedding (BRL:07:061)
- (4) so we sat on the wall at the top of the field, surveying this sea that hid their calls *till* they became but a part that accompanied the general noise of summer.(LBG:26:121)

以上の数字の比較からまとめると、アメリカ英語ではuntil, till 両語とも接続詞としての用法が多いが、tillにおいて、その傾向が一層顕著となる。イギリス英語ではアメリカ英語に比べて10%ほど低くなるものの、untilは接続詞としての用法が多いのに対して、tillではそれがほぼ半々の分布を示し、Brownと好対照を見せている。従って、少なくともLOBコーパスに限って言ってもQuirk et al. が言う一般的な傾向、即ち、untilは前置詞、接続詞としてほぼ同頻度で用いられるのに対して、tillは前置詞としての使用が主であるという記述とはいずれもずれがある。Quirk et al.の記述がどの時点のデータによるものか不明であるが、少なくとも1961年の書きことばの実態とは大きく食い違っている。因みに、Brownコーパスではuntil, tillともに接続詞の割合が7～8割を占める。

先に見たように、till/untilの選択に大きく関わるものとして文体的な要素がある。そこでまず、殆どの辞書等が指摘するこれらの語と文頭位との関連を

から頻繁に用いられたとの解説を付している。

また、これらの語に関して、少なくともある時期、あるイギリスの作家達にとってはどちらの語を使うかは「好みの問題」であったようである。例えば、Jespersen(1940)は、DickensやDoyleなどはuntilを好んで使い、Hardyはtillしか使わなかったようであると述べている。³⁾そこで、実際にこれら二つの語が現代英語においてどのように使われているかを1961年の言語資料である両コーパスに当たってみることにする。

III

まず、英米の両コーパスにおけるこれら二つの語の総頻度を見てみると次表のように、tillに比べてuntilが英米ともに圧倒的に多い。

	until	till	計
LOB	477 (86.4%)	75 (13.6%)	552
Brown	430 (90.5%)	45 (9.5%)	475

LOBでは全用例552の中で、477例がuntilで、86.4%を占めるのに対して、Brownでは全用例475のうち430がuntilで90.5%となっている。そして、tillについて云えば、アメリカ英語では全体の9.5%、イギリス英語では13.6%の低い使用頻度であるが、その中で、大きな差は無いにしろ、全体的に見た場合、イギリス英語の方がtillの使用頻度はやや高いということが言える。⁴⁾

そこでまず、till/untilの選択に際して前置詞もしくは接続詞としての機能との関わりはどうであろうか。このことに関してはQuirk et al.が主としてイギリス英語に関して、untilは前置詞、接続詞ほぼ同頻度で用いられ、tillは前置詞としての使用が主であると述べ、これらの語とその機能との関連性を示唆している。⁵⁾そこで、これらの点に関して、単純に頻度を比較してみると、下表に示すように全体的には接続詞としての使用が多い。

		LOB		Brown	
until	prep.	186(39%)	477	125(29%)	430
	conj.	291(61%)		305(71%)	
till	prep.	39(52%)	75	8(17.8%)	45
	conj.	36(48%)		37(82.2%)	

体レベルの差には触れていない。Copperud (1980) ではFowlerがtillを普通の形 (usual form) としていることに対してこれを、イギリス英語のようだ、とコメントする。

以上、英米の辞書・語法書に述べられている主だったところを見たが、イギリス系、アメリカ系どちらでもその用法の記述に関して特に大きな差はない。つまり、untilがやや形式ばった響きを持つのに対して、tillはそれに対置され、口語的であるということ、文頭ではuntilが普通であること、である。ただ、アメリカ系のものには、Friesの古い記述を除いてはtillを特に口語的とする積極的な指摘はなく、英米でやや異なった対応を見せている。

歴史的にはこれら2語のうち、tillの方が古く古英語期より存在し、中英語期に入ってから、現在untoという語に見られるのと同種のun-(=upto, as far as) が、このtillと結合しuntilが誕生した。このように、もともとuntilはtillを強調した形であるが、今日ではtillとの間にそのような用法の差異を指摘する記述は見られない。そしてどちらも前置詞としての用法が接続詞としての用法に先行する。

これらの語に関してはまだMEDが利用できないので、OEDを見てみると、tillの前置詞としての初出例はほぼ800年とし、それは場所的な意の前置詞toと同義として次の例をあげる。

a 800 *Inscription, Ruthwell Cross, Dumfries in O.E.T.* 126 Hwepræ
per fusæ fearran kwomu applilæ til anum.

いまひとつの機能である、接続詞としては1154年以降の用例をあげる。

1154 *O.E.Chron.*(Laud MS.) an. 1137, Par he nam pe biscop..&..hise
neues & dide ælle in prisun til hi iafen up here castles.

これに対してuntilは前置詞としては1200年、接続詞としては1300年頃より文献に現われるとする。前置詞、接続詞のuntilのもっとも早い例はそれぞれ次の通りである。

c1200 ORMIN Forr whatt te33 fellenn sone dun Off heoffne untill
helle.

c1300 Harrowing of Hell (Auch.) 29 [They were in woe] Vntil Crist
loked paim vnto.

untilの接続詞用法に関しては18世紀中は一般的ではなかったが、ほぼ1820年頃

これらの語は交代可能とするが、文体的にはuntilはtillに比べて、より形式ばった語であるとする。Swan (1980) も両語は全く同じ意味を表すとした後、tillは会話体で、より普通であり、untilは、会話体にも、形式ばった文体でも用いられると述べている。Quirk et al. (1985) はtillは主として口語に起こるとする。Todd & Hancock (1986) は両語の間に意味・文体の差はないとした後、tillはイギリスにおいて、特に会話で、より広く用いられ、untilはアメリカで用いられると述べている。Woodは、文の冒頭ではuntilがより普通であるとする。Howard (1993) はuntilをより形式ばった語とした上で、それが文頭に来ると響きが良いとし、音調面から説明を加えている。Fowler¹ (1926) では、まず、現在tillが普通の形であり、untilはいくらかゆったりとした、慎重な、あるいは大げさな感じを与えるとし、節もしくは句が主節に先行する場合はuntilがより普通であろうと述べる。ところが、その第2版(1965)ではこの前半の記述がすっかり削除され、それに続く部分、つまり、節もしくは句が主文に先行する文の文頭ではuntilがより一般的であろうという記述に止めている。また興味深いのはPOD⁵ (1969) では両語を同義とした後、節や語句の頭位で、また時に、ゆったりとした、威厳のある、仰々しい文体でuntilが「好まれる」(preferred) とするが、POD^{6, 7} (1978, 1984) では節や語句の頭位や形式ばった文体で「使用される」(used) に変わっている。また、OALDの第3版(第1刷改訂版1980) と第4版(1989) ではuntilはtillよりも形式ばっている旨の記述は変わらないが、前者ではuntilはtillの項参照の指示がなされているのに対して、後者ではこれが逆になってtillの方が、untilの項参照となっている。これらの事実は両語の用法に関する変遷の一つの側面を物語るものであろう。

一方、アメリカ系の辞書・語法書ではどのような記述が見られるであろうか。まず、些か古いFries (1940) はuntilが標準英語的であるのに対して、tillは俗語英語においてのみ使われると言う見方をしている。WDEU (1989) はuntilはtillよりもやや形式ばっていると言われているが、tillもuntilほどではないが、きわめて固い文の中で些かも不自然ではないと述べている。Bryant (1962) も、より形式ばった英語においてはuntilが好まれるとし、untilは一般に文頭に来るのに対して、tillは一般に文中に用いられるとする。Wilson (1993) は、やはり、untilがやや形式ばった語と考えられるとしながらも、そのすぐ後で、両語ともすべてのレベルで用いられると述べている。AHD (1969) では特に文頭に位置したuntilを形式ばった文で、より普通であるとする。Perrin (1965) はただ、untilの文(節)頭位の傾向を指摘するのみで、文

コンピューター・コーポラ利用による 現代英米語法研究* —tillとuntil—

杉 山 隆 一

I

アメリカ英語の言語資料Brownコーパス (the Brown Corpus) とイギリス英語の言語資料LOB コーパス (the Lancaster-Oslo/Bergen Corpus) を利用した一連の研究で今回取り上げるのは「・・・まで;・・・するまで」の意を表す同義語tillとuntilである。(この一連の研究の目指すところと両コーパスの概略については別稿で述べられているので、そちらを参照されたい。¹⁾)

II

Tillとuntilは意味的にはほとんど同義と考えられ、大部分の辞書にはこの2語は等符号で結ばれ表示されている。また、語法関係書でもその殆どがこれら両語を交代可能として解説している。Wood (1962) のように一応、これら2語の間には差はなく、その選択はリズムや音調の良さに依るとしながらも、時間的な幅によってこれらを使い分ける傾向を示唆する記述も無くはないが、²⁾ 前述のように意味的には殆どすべてのものが差はないとしていることから、ここでは次の3点に絞って見てみることにする。まず、これら二つの語の機能的観点(前置詞対接続詞)からの資料の検討、次に、これら両語の選択に関わる文体的な要素、そして語の使用に関する英米の地域差である。このような観点から以下、主だった辞書・語法書を見てみる。

まずイギリス系辞書・語法書であるが、Greenbaum & Whicut (1988) は、